厚高同窓会報

校章の由来
県立三中を意味した三つの剣を組み合わせ、初代大屋校長の考えで剛健・真剣・勤倹の三けん、更に智・仁・勇の三徳を兼ねた象徴として用いられて来た

第45号　平成23年5月1日発行
http://www.atsukou-dousou.org/

旧制中学卒業者　3,915名
新制高校卒業者　24,683名
合　計　28,598名

発　行
神奈川県立厚木高等学校同窓会
編　集
厚木高等学校同窓会広報委員会
TEL 046（221）4078
FAX 046（222）8243

▲第5回青春かながわ校歌祭
9月25日、県立青少年センターで開催。本校からは、軽音楽部、ブラスバンド部の現役生に応援団OB会、OB、OGの総勢約150名が他校を圧倒。

▲平成22年度通常総会
6月27日に厚木商工会議所大会議室で開催。講演会は、声楽家（バリトン）の森口賢二氏（高44回）による"ミニリサイタル"。

◀第10回地引網会
5月4日、好天に恵まれた鵠沼海岸「堀川網」で開催・10年目にして初めて100名を超える参加者で大賑わいとなった。

▲第2回憶い出の杜に親しむ会
11月6日、同窓林『憶い出の杜』見学とバーベキュー大会に各支部から47名が参加。絶好の秋日和に紅葉もお酒も十分堪能。

大震災に想うこと

同窓会会長
近藤　俊二（高6回）

今回の、東日本大震災では、大勢の尊い生命が奪われ、計り知れない被害を被りました。亡くなられた方々のご冥福をお祈りし、被災された皆様に心からお見舞い申し上げます。

さて、私は津波に押し流された被災地の映像や、福島原発の惨状を観たり聴いたりしながら、自分の体験した過去のいくつかの場面を思い起こしていました。

一つは、国民学校4年生で迎えた終戦前後の疎開生活や、食べ物を始めとする物のない時期のひもじさ、東京・平塚の空襲や焼野原の情景である。

二つ目は、大学を出て最初に赴任した名古屋での伊勢湾台風との遭遇である。1959年9月、初めて高校1年生を担任していたが、クラスの3人との連絡が途絶えたまま2週間、3週間と日が過ぎていく。頭の上にリュックを乗せ、膝上まで水につかりながらの生徒捜し。動物の水ぶくれした死骸をよけながら、屋根の上に避難する人に向かって生徒の名前を呼びかけた日々のこと。

三つ目は、関西戸陵会の設立に向け、一昨年、去年と2度訪れた神戸・大阪で、阪神大震災からの見事な立ち直りを目にしたことである。あの高速道路が落ち、ビルが倒壊し、延々と燃え続けた街の惨状からの見事な復活であった。

原発の不安はなお予断を許さないが、"ガンバレ日本"の世界中からの励ましに、私たちは心を一つにして応えなければならないと思います。戦後日本の復興と発展、名古屋・関西・近くは新潟の逞しい立ち直りが、東日本の各地にも必ず実現されると信じています。

本部活動報告

〈平成22年度事業報告〉

「在校生・卒業生」それぞれの絆を求めて

同窓会会長　近藤　俊二（高6回）

厚高生の現状と同窓会からの支援

22年度は県の「学力向上進学重点校」に指定され、学校は生徒の個性や能力の伸長を図るため、先進的な指導体制の確立を目指して努力している。その中で学力だけでなく学校行事や部活動を通しての人間性の育成にも意が注がれている。

戸陵祭は6月の体育部門と9月の文化部門それぞれで、若者の知恵とエネルギーの発散が見られ、大変好感がもてる。保護者や近隣の中・高校生の来場も極めて多い。

同窓会からは、部活動の支援を継続する一方、学校の外周を回っていたランニングコースが自動車との接触事故を招きかねない事情に鑑み、校内を中心としたコースの新設に協力。

校内ランニングコースの新設に資金協力

同窓生の交流の輪を一段と広げる試みも

総会・校歌祭・地引き網会・憶い出の杜に親しむ会などの同窓会本部主体の行事は、お陰様で年々賑わいの一途をたどっている。更に本年度は、各地域が自主的に行っている各支部の総会や、同級生仲間が呼びかけ合って開く同級会などに、通信費等を補助する「同窓会活動活性化補助金制度」を制定した。皆さんから拠出される同窓会費を有効に使っていただこうという試みである。同級会などが例年に増して活発に開かれたことは喜ばしいことである。もちろんその集いの中で「お前、同窓会費ちゃんと払っているか？」などの会話もはずんでいることと期待していることも確かである。

この会報の発行とその発行費なども大変な出費を伴う事業であるが、より強い同窓生の絆を求め、「厚高（厚中）を出てよかった」と思っていただくためにこれからも続けていきたい。

余裕が出来たら会費を納め、同窓会活動と現役の支援に使ってもらおうという愛校心の発露を、改めてお願いするところであります。

3月中旬に発行された「会員名簿」、個人情報云々で、理事会にも諮り慎重に進めてきた。表紙の絵・体裁については、高12回卒の石井清さんに献身的なご尽力をいただき、感謝している。結果的には、3200人以上の方々が購入を希望され、これからの交流促進に大いに役立つと確信している。

来年は「創立110年」の記念の年になるが、6月総会に私たち厚高のシンボル・大応援団旗を新調披露するという形で、110年を祝おうと準備を進めている。併せて、廃団となって久しい応援団の復活について、学校側に相談していることも報告し、心から喜べる年を迎えたいものである。

〈22年度の行事・活動報告〉

平成21年
4月13日　創立108周年開校記念日
　校内役員会と本部打ち合わせ
5月4日　「第10回　地引き網会」
　108名参加
5月8日　伊勢原戸陵会総会
5月16日　関西戸陵会設立総会
5月16日　大和戸陵会総会
6月5日　理事会
6月19日　愛川戸陵会総会
6月20日　海老名戸陵会
6月27日　平成22年度定期総会
　110名参加
7月3日　座間戸陵会総会
7月11日　睦合戸陵会交流会
7月24日　厚木戸陵会総会
7月25日　厚木連合戸陵会総会
8月28日　平塚戸陵会総会
8月29日　校歌祭練習会
9月12日　相模原戸陵会総会
9月25日　「第5回青春かながわ校歌祭」146名参加
11月6日　「憶い出の杜に親しむ会」50名参加
11月13日　泰野戸陵会総会
11月27日　理事会平成23年
2月6日　津久井支部会総会
3月6日　御所見戸陵会総会
3月10日　平成23年度版『会員名簿』発行

6月25日総会開催

平成23年度の厚木高校同窓会定期総会を次のとおり開催します。

日時／6月25日(土)
　午後1時30分より
会場／厚木商工会議所
　5階大会議室
案件／平成22年度事業報告
　平成22年度決算報告
　平成23年度事業計画案
　平成23年度予算案　他

総会終了後、写真撮影及び懇親会を予定しています。

解説・参考資料

① 校内ランニングコースの新設

厚高生はこれまで運動部及び一部の文化部において、学校敷地の外周をランニングに利用してきた。

このため、数年前より近隣住民から、ランニング中の生徒と車との接触事故が起きかねない状況にあり大変危険であるとのご指摘・苦情が再三寄せられていた。

そこで学校側では、平成22年度初めに「校内ランニングコース設置検討委員会」を発足、同時に県教育局まなび計画推進課とも相談・協議。半年かけて幅2m×長さ約600mのコース概要が出来上がった。

このコースの整備工事費約200万円は、学校からの支援要請を受けた、同窓会がその費用を全額支払った。

② 同窓会活動活性化補助金交付要網

（趣旨）

第1条　この要綱は、厚木高等学校同窓会会則第3条の規定に従い活動する支部会等の事業（以下「同窓会活動という」）を活性化させるための補助金を交付することについて、必要な事項を定めるものとする。

（補助対象等）

第2条　補助金の交付対象とする同窓会活動並びに補助金額は、「別表1」のとおりとする。

（補助金の交付申請）

第3条　補助金の交付を受けようとする者（以下「申請者」という。）は、補助金交付申請書に「別表2」に定める書類を添えて、同窓会長に提出しなければならない。

2　補助金交付申請は、毎年度1回とする。

（補助金交付の条件）

第4条　申請者は、事業の実施に当たり、次の条件を遵守しなければならない。

(1) 補助金は、補助対象事業の目的以外に使用しないこと。

(2) 同窓会の監査を求められたときは、関係書類を提示すること。

（補助金の支出）

第5条　同窓会長は、第3条の申請書を受理したときは、書類を審査の上、補助金を支出する必要があると認めたものについて、交付金額を決定し、支出するものとする。

（事業実績の報告）

第6条　同窓会活動を実施した申請者は、同窓会活動活性化補助金実績報告書を30日以内に同窓会長に提出しなければならない。

附　則

この要綱は、平22年4月1日から施行する。

別表1（第2条関係）

補助対象事業		補助金額
1	同期会・総会等の支部活動	20,000円

別表2（第3条関係）

補助対象事業		添付書類
1	同期会	(1) 同期会開催通知（写） (2) 参加者名簿 (3) その他資料
2	総会等の支部会活動	(1) 支部会総会等開催通知（写） (2) 会員相互の親睦・交流を図るための各種事業開催資料（写） (3) その他資料

平成23年度の主な行事予定

4月12日　新入生オリエンテーション
4月13日　創立109周年開校記念日
5月4日「第11回地引き網会」
6月4日　理事会
6月25日　平成23年度定期総会及び懇親会
8月28日　校歌祭練習会
9月23日「第6回青春かながわ校歌祭」
11月上～中旬　「憶い出の杜に親しむ会」
11月中～下旬　理事会

学校情報

本年度4月の異動で荒木高司学校長が小田原高校学校長に転任され、新たに田中均学校長（相模原中等教育学校・相模大野高校）をお迎えしました。同窓会校内役員では、事務局総務としてご尽力いただいた社会科の渡辺卓先生（高31回）が綾瀬西高校へ転勤となり、清川青少年の家より社会科の三橋功先生（高38回）がご着任されました。

"三けん"に込めた 逞しさの継承

学校長　田中　均

平成23年3月11日14時46分、未曾有の大地震と大津波が東北地方と関東地方を襲い、大変多くの人々が犠牲となりました。犠牲になった方々のご冥福をお祈りするとともに、被災された方々へのお見舞いを申し上げ、被災地の一日も早い復興を心よりお祈り申し上げます。

首都圏でも建物の壁が崩れ、電車がストップし、帰宅できない方や学生が会社や学校で夜を明かしました。この時、私は相模原中等教育学校及び相模大野高等学校の校長として、生徒の安全確保に努めておりました。それから一カ月が経とうとしていますが、日本全体が深い悲しみから立ち直ろうと「がんばれ東北、がんばれニッポン」を合言葉に、復興への足がかりを築こうとしています。

こうした中、平成23年4月1日、荒木校長を引き継ぎ、本校に着任いたしました。

着任早々、校章の『三けん』についてのお話を伺い、厚木高校の伝統を私なりに解釈して、入学式でも新入生にお話をしました。

剛健は『逞しく健やかに育て』で、この逞しさとは体力だけでなく、心の逞しさも意味するもので、これが厚高生らしさを象徴しているように感じました。厚高生には胆力があり、思いやりがあって人の気持ちが分かる、そんな心の逞しさと優しさを持って積極的に人と関わり、復興する日本を担う人材に育ってほしいと思います。

真剣は、分かりやすい言葉ですが、ここにも文武両道の厚木高校の伝統が生徒に引き継がれていると思います。学業、戸陵祭などの学校行事、部活動に真剣に打ち込めという意味が込められています。

勤倹については、『労を惜しまず人の為に汗を流せ、倹約、節約を旨とせよ、復興する日本を担うリーダーには必要な資質である』と話しました。私がとても気に入った言葉で、昔は日本人誰もが持っていた勤労観を、学校で、家庭で意識して培わなくてはならない状況があります。生徒には、この勤倹を旨とし、将来、社会に貢献する人材に育ってほしいと考えています。

厚高生には、人と積極的に関わる逞しさと、文武両道を実践できる逞しさ、労を惜しまず人の為に汗を流すことが出来、倹約、節約を旨とする逞しさを養って貰いたいと思います。そんな伝統を継承する学校の先頭に立ち、微力ながら生徒のため尽力したいと思います。どうぞよろしくお願いします。

期待と不安を胸に 母校の教壇に立つ

三橋　功（高38回）

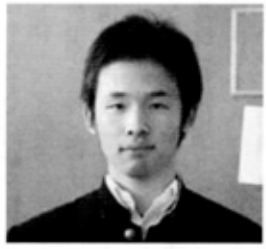
平成23年4月、母校である厚木高校に着任いたしました。教員として母校に着任された先輩方も数多くいらっしゃいますが、まさか自分がという驚きの気持ちと母校の教壇に立てるという嬉しさ、そして自分自身が生徒だった頃の先生方のようにやっていけるか等、期待と不安の入り交じった状態でのスタートとなりました。校舎内を歩くと「あぁ昔のままだ」と変わっていない部分もあれば、「こうだったかな？」と変化を感じさせる部分もあり、時の流れを感じずにはいられません。

自分自身が在籍していた頃をふりかえってみると、（学習のことはさておきまして…）、とにかく学生生活が楽しかったことが思い出されます。当時は1学年12クラス、1クラス45人と人数が多かった時代でした。戸陵祭などの学校行事では、自分のクラスがいかに団結して盛り上がっているかを競い合っているかのようでした。戸陵祭の時には「意味もなく」朝早く登校しなければならないといっては、学校に近い友人宅に泊まったり、体育祭でクラス対抗リレーがあるといえば、そのメンバーが「何故か」放課後陸上部と一緒に練習したり、球技大会があるといえば「なんの違和感もなく」朝練を実施するなど、とにかく仲間たちと一緒に楽しく過ごしたものです。部活動にしても、学習にしても、学校生活全般について「仲間が頑張っている」という刺激をお互いが受け合うことで、私自身も前向きに高校生活に取り組めてきたのだと思います。そんな素晴らしい出会いや活動の場が与えられているのが厚木高校であります。

厚木という地元で生まれ育った私にとって厚木高校は憧れの高校でした。それは今も変わりません。私だけでなく、厚木近辺に住む人たちにとってもその思いは同じだと思います。そしてこの厚木高校に着任した今、母校のために精一杯頑張っていこうと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

茅賞

卓球部の遠藤 聖也君（3E）に



3月1日、第63回卒業式が行われ、316名の卒業生が戸室の丘を巣立っていった。卒業生の中から、学業・部活動・人物のすべての面で特に優れている生徒に贈られる22年度の「茅賞」は、先生方の推薦を受けた遠藤聖也に決定。賞状と記念品（シャーペン）が同窓会長から贈られた。

遠藤君は依知中学の出身で、卓球部に所属し、熱心に部活動に励んだ。学力も優秀で東大の理一に進み、今後が大いにたのしみである。

卒業生としては珍しく俳句が堪能で、伊藤園のボトルにその句が登用されたこともあったと聞く。

◇◆◇◆◇

「茅賞」は、本校卒業生（中11回）である故茅誠司氏の文化勲章受賞を記念に設立されたもので、学業・人物とも優れた生徒に贈られる。科学者でもあった茅氏は、昭和32年から6年間、東京大学総長を勤められ、さらに第4代厚高同窓会長（昭和38年から平成1年まで）を務められた。昭和41年から始められたこの賞は、22年度で43回目を迎えた。

過去5年間の主要大学合格者数

［現役・既卒の合計数　（　）は既卒者］　平成23年4月2日現在

	学校名	23年春	22年春	21年春	20年春	19年春
国立	京都	（　）	（　）	3（2）	（　）	2（2）
	千葉	3（1）	2（0）	5（1）	4（1）	3（2）
	筑波	3（1）	6（2）	2（0）	5（0）	5（0）
	電気通信	5（4）	1（0）	3（1）	4（2）	4（2）
	東京	3（1）	3（0）	2（0）	3（1）	8（2）
	東京外国語	2（1）	2（0）	1（0）	1（1）	4（0）
	東京工業	6（0）	6（0）	6（0）	7（2）	8（4）
	東京農工	6（2）	3（0）	7（1）	4（2）	4（0）
	東北	2（2）	2（1）	4（0）	2（0）	2（0）
	一橋	2（1）	3（1）	1（1）	2（1）	1（1）
	横浜国立	21（3）	19（2）	14（3）	10（2）	10（3）
	国立計	71（27）	64（10）	61（11）	55（20）	68（23）
公立	首都大学東京	11（3）	14（2）	12（4）	12（1）	6（0）
	横浜市立	7（1）	3（0）	6（2）	7（0）	6（0）
	公立計	20（4）	19（2）	18（6）	23（1）	16（0）
私立	青山学院	53（8）	52（5）	48（8）	79（9）	42（2）
	神奈川	18（8）	16（1）	23（2）	31（2）	39（6）
	北里	19（3）	15（0）	18（1）	12（3）	13（6）
	慶応義塾	33（4）	35（4）	31（7）	33（9）	42（12）
	上智	32（3）	14（4）	15（5）	20（3）	27（13）
	専修	32（12）	14（1）	19（6）	14（3）	18（3）
	中央	79（26）	67（21）	68（8）	57（9）	66（12）
	東京理科	36（4）	34（7）	51（7）	50（10）	37（12）
	日本	23（7）	14（4）	18（4）	27（11）	15（5）
	日本女子	18（2）	9（0）	8（1）	15（1）	18（5）
	法政	36（10）	38（6）	34（8）	28（11）	47（11）
	明治	79（21）	114（21）	103（28）	74（21）	84（18）
	明治学院	30（3）	24（4）	8（2）	16（5）	19（4）
	立教	29（6）	54（7）	40（9）	49（12）	51（13）
	早稲田	79（21）	111（21）	63（21）	77（23）	69（26）
	私立計	772（207）	772（128）	725（147）	773（167）	800（198）

最近5年間の進学状況

卒業生進路	23年 高63回	22年 高62回	21年 高61回	20年 高60回	19年 高59回
国公立大学	54	62	59	52	54
私立大学	180	180	159	185	180
短大／大学校	1	1	1	2	4
専修学校等	2	2	2	2	2
進学者数計	237	245	221	241	240
入学率	75%	77%	82%	76%	76%
卒業生総数	316	318	270	316	314

幻のノーベル賞

受賞したヘック教授と同じ発見

東京工業大助教授 溝呂木　勉 博士（高3回と同期・故人）

2010年のノーベル化学賞は、鈴木章・北海道大名誉教授、根岸英一・米パデュー大特別教授、リチャード・ヘック米デラウェア大名誉教授の3人に授与されましまが、厚木高校に在籍したことのある溝呂木勉氏が存命ならば、3人とも日本人だったかもしれません。

文責・副校長 佐々木健雄（理科・化学）

昨年、鈴木章・北海道大名誉教授、根岸英一・米パデュー大特別教授の日本人2名がノーベル化学賞を受賞した。3人の受賞者のうち2名が日本人という快挙は大いに日本を沸かせ、話題となった。

もう1人の受賞者は、リチャード・ヘック氏。米デラウェア大名誉教授である。ヘック氏は通常結合しない2つの有機物をパラジウム(Pd)などの無機物によって結合させる反応「ヘック反応」を発見した。

しかし、この「ヘック反応」をヘック氏よりも先に発見していた人物がいた。故・溝呂木勉氏である。このことが発覚したのは去年10月、ノーベル化学賞受賞者が発表された後、本校に入った2本の電話がきっかけだった。「ヘック氏よりもこの反応を先に発見していた卒業生がいる」

電話をかけてきた2人は本校の卒業生で、溝呂木氏の同期生である。電話を受けた佐々木副校長は独自に調査を開始。すると溝呂木氏について様々な情報が集まったという。

ヘック氏がこの反応を発見したのは1972年。対して溝呂木氏がこの反応を発見したのは1971年とされていて、国内専門家の間でも「溝呂木氏の方が先に発見していた」との声が多く上がっている。ではなぜ「ヘック反応」という呼ばれ方の方が世の中に浸透しているのか。それは、溝呂木氏がこの反応を掲載したのはややマイナーな論文誌であったのに対して、ヘック氏はメジャーな論文誌に掲載し、有名となったからだ。そのため、現在では単に「ヘック反応」と呼ばれることが多い。しかし、ヘック氏の論文に溝呂木氏の論文が引用されていることなどから「溝呂木・ヘック反応」とも呼ばれている。

溝呂木氏は本校の高3回生と同期（昭和23年入学）だが25年1月に都立新宿高校へ転校、卒業後は東京大学へ進学した。その後、東京工業大学研究員を経て、同助教授となった。「溝呂木氏が存命なら、受賞者は3人とも日本人だったかもしれない」と溝呂木氏の死を悼む声は多い。

『厚高新聞』第237号より

略歴【溝呂木　勉】

昭和7年（1932年）生まれ
昭和20年（1945年）4月、県立厚木中学入学
昭和25年（1950年）1月、都立新宿高校へ転校
その後、東京大学を卒業、民間企業、通産省工業技術院、東京工業大学研究員を経て同大助教授に。
昭和55年（1980年）没。享年47歳

マスコミ各紙が取り上げる

「日本人2人と同時受賞したリチャード・ヘック米デラウェア大名誉教授が発見した反応については、国内専門家の間で、東京工業大の溝呂木勉氏（故人）が先に発見したとの声が上がる。林民生京都大教授（有機化学）は『ヘック反応は溝呂木・ヘック反応とも呼ばれている』と指摘。東京工業大の碇屋隆雄教授（有機化学）は『もし溝呂木さんがご存命だったら、受賞は3人とも日本人だったかもしれない』と語った」

四国新聞社（SHIKOKU NEWS）より

「玉尾皓平氏・理化学研究所基幹研究所所長（有機合成化学）によると、ともに受賞したヘック氏が1972年に発見した『ヘック反応』については71年に東京工業大学の故・溝呂木勉氏も発見していた。『溝呂木氏は若くして亡くなられたが存命だったら（受賞した）と思う。』と残念がる。」

日本経済新聞より

「今回受賞したリチャード・ヘック米デラウェア大名誉教授（79）の化学反応も、研究者の世界では『溝呂木・ヘック反応』とも呼ばれる。『溝呂木』は故・溝呂木勉・東京工業大学元教官のことで、溝呂木さんがヘック名誉教授の1年前に発見した反応だった。」

毎日JPより

小学4年当時。最後列一番右が溝呂木氏。前から2番目の左から3人目が井上氏。最前列左から3人目が中島氏。

溝呂木勉氏とは、お互い生家が近かったこともあって、幼・小・中（高）と、およそ12年間を共に遊び学んだ良き"ライバル"でもあったという井上欣司さん（高3回）にその思い出を寄稿していただきました。また、貴重な写真（小学4年当時）を提供いただいたのは同じ河原口仲間の中島重信さん（高3回）です。

溝呂木君を偲んで

井上　欣司（高3回）

溝呂木君の生家は海老名町河原口地区で私の生家とは3～400メートルの距離でした。近くのお寺で幼稚園の1年間と昭和14年4月より海老名地区で1校しかなかった海老名尋常高等小学校河原口分校に入学し、国分地区の本校にました。と云うのも県立第三厚木中学は川崎や相模原からも入学生が通う神奈川県では指折りの中学でした。自転車通学なら楽なものですが、当時は一家に1～2台しかない時代でしたので、素足に下駄履きで、白風呂敷に教材や弁当を包み、徒歩で砂利道を40分以上歩いて通学しました。

昭和20年、旧制中学1年で終戦を迎え三人とも新制高校に進級しましたが溝呂木君は厚木高校では東大受験が不安だということで二年の三学期から都立新宿高校に転校し、見事東大に合格しました。ただし厚高の卒業生約200人の中からも東大6人、早稲田30人、慶応15人程度が合格しましたけれど。

さて、彼の家族の話になりますが、父親は国家公務員で、母親は小学校の先生をされて田舎町ではエリート一家でした。小学校時代は溝呂木君や今は横浜に在住の中島重信君等と級長争いや優等生争いをしたものでした。当時は冬期には20～30センチの積雪も珍しくありませんでしたが、そういう状況でも皆勤賞や優等生を目指して休むことなど全く考えずに皆頑張って通学していました。

私の家も祖父が教育熱心で当時引け目は感じなかったけれど、溝呂木君の潜在能力と真面目な人間性には一目置かざるを得ませんでした。

東大卒業後、彼は民間会社に勤務。その後通産省工業技術院に入り、数年後に東京工業大助教授に就いてから学究の道に進みました。

この度ノーベル化学賞も夢ではなかったろうとして報道され、偉大なる研究者としての才能とその業績の大きさに驚くと共に誇りに感じています。

惜しむらくは47歳という若さで他界しましたので、私達同級生は惜しい仲間を失ってしまったと大変残念がっています。彼は若くして亡くなりましたが、私達には忘れることの出来ない存在であることは間違いありません。心から溝呂木君の御冥福を祈って拙文を終わります。

支部会便り

このコーナーでは、各支部会の活動状況や会員からのコラム、同窓OBの活躍ぶり等を紹介します。

秦野戸陵会

【追悼】大野訓男（高11回）副会長を偲ぶ

睦合戸陵会前会長　難波　浩（高11回）

秦野戸陵会の発展に尽力された大野訓男さんが逝去されました。秦野戸陵会役員及び本部役員として活躍された故人を偲んで、親友の難波さんに追悼文を寄稿して頂きました。

昨年11月2日に厚高同窓会副会長の大野訓男君が入院していた東海大学病院で肺炎により逝去し、その69年の生涯を閉じました。

大野君との出逢いは今から50数年前、厚高柔道部に同期生として入部、共に稽古で汗を流した時からでした。当時、少年雑誌『冒険王』に柔道の強い少年を主人公にした「イガグリ君」と言う漫画が連載され、全国的に子供達の人気を博し、柔道は憧れの的でした。

1年生部員は22名で上級生を合せると70名を超え、顧問（師範）は山崎勝治先生で、道場は熱気で溢れ、厚高柔道部の全盛時代でした。

山崎勝治先生で、道場は熱気で溢れ、厚高柔道部の全盛時代でした。

大野君は、秦野市の本町中学校出身で、厚高入学から柔道を始め、小柄でしたが粘り強い、しつこい柔道で頑張っていました。同期生の中では、気さくで明るく、誰とでも親しくなる性格で前歯に金を填めていた事もあり、「金チャン、金チャン」と呼ばれ人気者でした。

特に忘れられない思い出は、3年生の夏、大野君のご両親からレギュラーだった佐藤博久、町山良行、岩堀紀男と私の四名が自宅に招待された時の事です。水無川河畔に大きな料亭を経営されており、本格的で豪華な料理を目の前に、猛者で鳴らした我々も度肝を抜かれ、食べた事の無い美味しいご馳走を腹一杯食べさせて頂きました。食糧事情の悪かった時代だけに、強烈な印象に残っています。

厚高卒業後、大野君は中央大学経済学部に進学、卒業後は川鉄商事（株）に勤務し、修子さんと結婚、二男一女をもうけました。我々もそれぞれの世界で生活し、疎遠となったものの、再会したのは、厚高創立百周年記念事業に関わった時でした。大野君は秦野戸陵会、私は睦会戸陵会の役員として事業推進に全力を挙げ、盛況裡に終了する事が出来ました。その式典会場で長男の真一君（高37回卒）を「僕の息子だよ。」と、内心得意げに同期生等に紹介していた姿を思い出します。

その後、新体制となった厚高同窓会では、大野君は秦野戸陵会の副会長に就任すると共に、厚高同窓会会計監査を経て、平成20年から副会長として、献身的に尽力して頂きました。もう二度と大野君の笑顔を見る事は出来ないが。「お疲れ様でした。」と言いたい。心安らかにお休み下さい。

お忙しい中、寄稿して頂いた難波さんに感謝申し上げると共に、秦野戸陵会の会員一同、大野さんのご冥福をお祈りいたします。

伊勢原戸陵会

真の二元代表制をめざして

小沼　富夫（高29回）

昭和49年、高29回卒の我々が入学した年であります。当時、本厚木駅の改良工事と北口駅前の再開発事業が始まった時期であり、現在の本厚木駅と北口・南口の駅前地区は我々が卒業した後に完成をしたものであります。本厚木駅周辺は地盤が悪いため開発が遅れたと当時聞き及んでいました。しかしながら、現在の本厚木は当時と大きく様変わりをし、昼夜を問わず大変活気のある街となっております。

まちづくりは時間とお金がかかるものであります。どの街にも見られるような画一的なまちづくりは私の目指すものではありません。その街のらしさを表現できるまちづくりが私の理想であります。そのような思いの中で、伊勢原市議会議員になったのは、4年前の平成19年の統一地方選でありました。

そもそも、私は伊勢原市社会教育委員会議長、伊勢原市行財政改革推進委員、伊勢原市総合計画審議会委員、神奈川県湘南地域県民討論交流集会座長など、数々とまちづくりに関わってまいりました。各委員会、審議会での私の意見・発言は、公としての議事録にも載り、執行部のもとへも伝わった事でありましょう。しかしながら、今一歩の達成感がなく、市民の立場での意見でしかないなと強く感じた時に、私は議員になることを決断いたしました。

この生まれ育った伊勢原のまちづくりに対して、自分自身の思い、考えを、より具現化するには、自らの立場をその中に置き、火中の栗をも拾う覚悟で伊勢原市議会に飛び込んだ訳であります。

この4年間で地方議会を取り巻く環境は大きく変わり、昨今、首長対議会の構図の中で地方自治が大きく揺らいでおります。鹿児島県阿久根市や愛知県名古屋市が代表事例でありますが、首長が議会の存在意義を否定し、首長対議会の構図をドラマ化している事態は、二元代表制の崩壊に繋がるのではなかろうかと大変危惧しているところであります。

私は、二元代表制の一翼を担う議会が、その使命を再確認・再認識をして変わる時にきていると考えます。チェック機関としての議会、執行機関の行政執行を監視する働きなどの他に、これからの議会は政策立案機能を積極的に推進しなければならないと考えます。政治はドラマではありません。トルストイは、「政治とは情熱と判断力をつかい、堅い板に穴をあける様なものである。」と言っています。『真の二元代表制をめざして』これからも議会改革に取り組んでまいる所存であります。

平塚戸陵会

10年ぶりの総会開催　会長以下新役員を選出

会長　落合　重治（高13回）

講師の厚木商工会議所専務理事原隆氏（高18回）

昨年8月28日平塚東海栄館において荒木高司校長、近藤俊二同窓会会長を迎え、旧厚木中学35回生から高校22回生まで21名が出席、10年ぶりに総会が開催された。

総会では次の通り新役員が選出された。

会　長　落合　重治（高13回）
副会長　熊沢　一英（高13回）
副会長　岡崎　雄二（高15回）
副会長　堀田　利久（高17回）
幹事長　渡辺　兼行（高19回）
会　計　金子　敏明（高21回）

新役員により平成22年度事業計画案、収支計画案の議題が提案され満場一致で可決、新会長のもとで新たなるスタートを切った。

総会の後、懇親会入り来賓の荒木校長より厚木高校の教育内容、生徒気質、進学状況等楽しく話して頂いた。そして近藤会長から平塚戸陵会の新体制に対して、お祝いと激励のお話をいただき、今後の厚木高校同窓会への積極的参加を依頼された。

楽しい会話のはずむ中で時間が過ぎ、最後に校歌を全員で合唱して散会した。

相模原戸陵会

小川勇夫（高1回）前相模原市長の胸像を建立

事務局長　安藤　和次郎（高9回）

相模原市長を3期10年勤め、病で76歳で急逝した第6代市長の故小川勇夫氏（高1回）は私たち相模原戸陵会の生みの親であります。功績を称え3年前に篠崎源太郎会長が相談役（中31回）大野則夫氏が幹事長（高20回）となり、建立に奔走し呼びかけたことから、実行委員会が設立され、同窓生ら多数が協力し、協賛金は940名余から集り実現したものです。

建立場所は小川さんの自宅に近く、相模原市緑区二本松3丁目の二本松小学校入口交差点、3月6日に除幕式が行われ、加山俊夫市長はじめ関係者50人が小川さんの功労をしのびました。

小川先輩は「未来を見据えたまちづくり」・「街角からの発想」・「公平・公正・清潔」を信条に市制運営を担われ、旧津久井4町との合併を実現して今日の相模原市の骨格である政令指定都市への道を開き、市民の宿題である米軍相模原補給廠の1部返還へ道筋をつけたことが最も大きな功績であるといわれております。

小川先輩は、県園芸試験場相模原分場で岡部誠君（高9回）等が永年研究し改良した照手姫のハナモモの普及には地元産として特に支援され、地域おこしにご理解と実績をいただき感謝しています。昨今未曾有の災害で被災された地域の方々にお見舞い申し上げると共に私たちは今まで経験したことのない困難に遭遇していますが、それぞれの立場で母校・校歌を愛した小川先輩の遺徳を大切にし活動することを祈念します。

座間戸陵会

迷プレイヤー集結！第1回座間戸陵会ゴルフ大会

会長　瀬戸　宏孝（高4回）

座間戸陵会主催の第1回ゴルフ大会が11月12日、本厚木カントリークラブで開かれました。当日は秋晴れに恵まれ、腕に自慢のプレーヤー23名が集合し、技を競い合いました。

先輩、後輩の垣根を越えて和気あいあいのうちに試合が進行し、珍プレー、迷プレーが続出しましたが、最終的に元県教育長の曽根秀敏さんが優勝しました。

年2回は定期的に開催し、他地域の方々の参加も多いに歓迎し、今後も末永く続けていこうと申し合わせ、当日は散会しました。（次回は4月22日厚木国際カントリークラブで開催）

座間戸陵会（旧称は両青会）は昭和61年2月22日に座間市居住者の方々を中心に旧制中学卒業生160名でスタートしました。現在会員約500名のOBに総会の案内状を出しており、総会は原則毎年5月に会場も一定の場所にして、出席しやすいように配慮しております。総会では、予算等を審議するとともに、各界の一線で活躍しておられる厚高の卒業生を主に講師に招き講演会を行っております。昨年は郷土史家の方をお招きし、自分たちが住んでいる街についての成り立ち等、興味深いお話をいただくなど、研鑽に努めております。

藤田俊雄先輩（高7回）を偲んで

昨年12月7日、74歳でご逝去され、家族葬を済まされたことを聞き、元銀行の仲間とさいたま市のご自宅へお悔やみに伺いました。その折ご遺族の同意を得て、「偲ぶ会」を去る3月5日（土）藤田先輩の郷里の近く、小田急線町田駅南にある会場にて、不肖私が代表幹事を担当し、幹事10名の協力で開催。

ご遺族はじめ96名の銀行OB・同窓生の方々が出席され（ご香料のみご出席含め）、銀行の酒井勲頭取からは、かつての支店の仲間としてご挨拶がありました。

特に藤田先輩は銀行の各部署でも人望と存在感があり、元上司や仲間からの挨拶で在りし日の活躍を偲びました。

同窓生は応援団OB会長・柔道部の大谷哲郎先輩（高6回）はじめ、柔道部OB会真崎和秋会長（高22回）ら柔道部・応援団のOBの方々13名の参加を頂き、改めて感謝申し上げる次第です。

大谷先輩のご配慮で、同級生の神名治義先輩と柔道部後輩の菊池原康夫君（高9回）が挨拶し、菊池原氏から入学直後に応援の指導での勝利の拍手を見て感激し、応援団の幹部に志願し、卒業後も出先でお会いした際も気さくに声をかけて励まして戴いたことを感謝。余りにも早いご逝去を惜しみ、ご冥福を祈りました。

私も半世紀以上前になりますが、親父も学んだ伝統ある柔道部へ菊池原君ら30名余りの同級生と入部し、暑中・寒稽古を通じて鍛えられ、畳の上が青春でした。入学早々に1年生全員が昼休みにコンクリート敷きの中庭に集合し、応援団長・藤田副団長から校歌・応援歌について訓示され次に同窓を何度も練習し指導されたものでした。

藤田先輩は柔道部主将でしたので、緊張し練習。特に第三応援歌の歌詞「尊き恋の友として」を解説され、厳しさの中にも心優しい先輩という強い記憶がありました。

卒業後は同じ信用金庫に勤務し（後に銀行に転換）部署は異なりましたがよく指導・激励されたもので、15年前の定年退職時には「激励会のタベ」の代表幹事をさせて戴き、お返しは何がいいか、聞かれたので同級生らが改良した照手ハナモモを推薦し、紅・白を使用して頂いた程母校愛の強い先輩でした。

本人の遺稿として柔道部OB会20周年記念誌から紹介します。

青春時代の「心・技・体」

第5代会長　藤田俊雄

本厚木駅を下車し神奈中バスの車庫を過ぎると一面に広がる水田、青々と伸びた稲の畦道を歩き田村堰を渡ると、はるかに見える戸室の丘へ20分。夏の道場は、早朝から大先輩である難波さんの同窓メンバートが来校し直接指導に当たってくれた暑中稽古。我々は「柔軟体操」から「受け身」を交互に稽古、やがて山崎先生の見守る中「乱取り」へと進む。「乱取り」では諸先輩方へ次々と胸を借りる訳ですが、何回挑戦しても一本も取れず、唯々投げられ玉の汗を流すのみ（見る見る脛は紫色に腫れ上がる）。息は上がり、極限状態の中にあっても一本取りたい一心から連続技で「大外落とし」を編み出し以降武器とした思い出、数年前に迎えた定年、その後も健康に恵まれた体力の維持、あらゆる仕事に対戦する挑戦意欲の持続などは自分なりに思うと青春時代に鍛えた「心・技・体」の賜であろうか。

定年退職時に伺った藤田先輩の信条は【仕事は人間である　人の繋がりこそ　大成させる】でした。

藤田キャプテン、長い間のご指導ありがとうございました。ご冥福を祈って　合掌

柔道部OB　安藤　和次郎（高9回）

海老名戸陵会

海老名畜産の「本物作り」

海老名出身の厚高卒業生で現在は愛川町で大規模な「養豚業」「食品加工業」を経営されている松下憲司さん（高17回）を訪ねてお話を伺いました。

松下社長が海老名畜産（有）（愛川町に事務所がありますが、出身地である海老名のことを忘れることなくこの社名を使い続けてくれているということは海老名戸陵会にとって嬉しい限りです。）を始めたのが今から40年前、この間に作り上げたシステムは豚の飼育からその商品が消費者に届くまでの工程に一貫して「本物作り」という共通理念があります。

○生産部門――自然の摂理を生かした養豚方法の確立

現在までに作り上げた豚舎のシステムは自然界のもつ合理性を信じて作りあげたもので、自然界の力を利用した浄化システムのことです。床におがくずが分厚く敷き詰められ、豚の足元は森林の大地のようです。天窓から陽光が降り注ぎ自然の風が通りぬけます。十分な面積の中で1頭1頭隔離せず、集団飼育がされています。床のおがくずは浄化システムに利用されています。床に落ちた糞尿はおがくずに住む微生物により分解され、清潔に保たれています。社長いわく「豚の幸せを考えるともっと広くてもいいんだが・・・」このように本来動物が暮らしていた自然環境に近い豚舎で豚は健康的に育てられています。

○加工部門――本物の味を作る豚肉加工方法の確立

本物の味を構築できたのは「確かなお客様」と共に商品開発ができたからだと考えています。開発方法は消費者の目線からみた身体に有害なものは使わないということとしました。試行錯誤の中で「伝統の加工技術」は化学調味料を使わず天然物だけを使って肉の保存をしてきた人間の知恵の蓄積なのです。だから安心・安全・本物は「自然の恵み」と「伝統の加工技術」から生まれると気付いたのです。その結果天然素材の調味料を使った伝統的な加工方法（ヨーロッパの伝統的なハム・ソーセージ作りから学ぶ）で「本物の味」を作り出すことに成功したのです。

松下社長には「これから食をおぼえる子どもたちに本物の味を知ってほしい」そんな強い思いがあるようです。

広報委・廣田　敏之（高17回）

近代的な設備のもと「本物作り」を目指す海老名畜産を訪問

御所見戸陵会

地球温暖化を止めよう

泊瀬川　孚（高14回）

なぜ温暖化が起きるのか？　それは地球を取り巻く大気にある。地球の大気は酸素が約21％、残りの大部分は窒素。そしてわずかな「温室効果ガス」発生代表格の炭酸ガスです。地球は大気中にこの炭酸ガスがある事によって適度の温室効果により温暖な気候に保たれてきた。その結果、人間をはじめとする動物や植物が繁栄し今の地球が成り立ってきた。しかし産業革命により工業が発達すると共に石油等の化石燃料を大量に消費する事になった。これを言い換えると、45億年の長い地球の歴史の中で過去の植物が地中に炭素を固定してきたものを掘り起こし、炭酸ガスとして大気中に放出している事になる。こうして地球の大気は炭酸ガスが増加する事になった。

1960年代頃から炭酸ガス濃度の観測が始まったが年々濃度が高くなり、産業革命以前は280ppmであった濃度が最近では390ppmになっている。これにより現在地球の温度は0・6℃上昇していると言われている。

独立行政法人日本環境研究所では温度上昇を2℃、そのために炭酸ガス濃度を475ppmに抑えたいとしている。このような実態を基に政府は2020年に炭酸ガス排出量を1990年比25％カットするとしている。最終目標は50％カットです。これにより温度上昇を2℃に抑える事が出来るという予測です。温度上昇によってどのような影響が出るのか？　気温の上昇により北極や南極の氷が溶け海面が上昇、海抜0m地帯の珊瑚の国々が水没。海水温の上昇により台風が大型化。2005年にニューオーリンズを襲い5000人以上の死者・行方不明者を出したハリケーン「カトリーナ」は温暖化の影響という事もできるようです。それまでアメリカは地球温暖化対策の京都議定書等にとても消極的だったのに、この台風をきっかけにようやく重い腰を上げたような気がする。世界的にはブラジルやミャンマーの洪水、ロシアやオーストラリアの干ばつや洪水等自然災害が頻繁に起きるようになっている。日本では昨年は幸いに台風が少なく被害もさほどなかったように思う。しかし局地的な豪雨はかつてない被害をもたらしてる。7月には北九州小倉南区、山口県山陽小野田市、広島県庄原市、岐阜県可児市、長野県飯田市で大きな被害が発生している。今年の大雪も関連があるようだ。この他生態系への影響として、日本ではセミや蚊の北限域の上昇、ミカンやリンゴの栽培適地の上昇など、世界的には北極海の海氷の縮小による北極熊の絶滅危惧種化、各地の氷河の後退等が顕著になっている。温暖化を止めるにはどうすればよいのか？　その答えは温室効果ガスの排出を止める事です。化石燃料の使用をやめる事ができれば温暖化は止まる。そのために当面はできるだけ化石燃料の消費を抑制する。無駄な電力の使用を止める。エネルギー効果の良い機器を使用する。化石燃料を使わないエネルギー供給（風力発電、太陽光発電、バイオエネルギーの利用）等です。

厚木連合戸陵会

厚木連合戸陵会ゴルフコンペ
団体は南毛利が2連覇

幹事長　伊藤修治（高17回）

早いもので、厚木連合戸陵会が創立されて今年で足かけ10年になります。2002年のあの感動の母校創立100周年を迎える丁度1年前のことです。地元の厚木市内に卒業生の半数以上が在住していながら、同窓会支部がないのはどうした事かと。また100周年記念事業や行事がそれで成功させられるのかと。その受け皿にならんと有志相つどい、わずか半年で厚木市内8地区（旧8ヶ町村）に支部が結成される事になりました。そしてその連合体として、連絡調整機関として発足したのが厚木連合戸陵会なのです。そしてスケールメリットでもあり会員の最も楽しみにしているのが年1回開催される『厚木連合戸陵杯』争奪ゴルフコンペです。今年はゴルフ委員会（森久保純生委員会）の主管準備で1月27日（木）に本厚木CCにて開催されました。近藤俊二同窓会長をはじめ伊勢原、相模原、海老名、そして初参加の平塚支部から20名を超えるゲストを迎え総勢104名の大コンペとなり大いに盛り上がった大会となりました。

団体優勝は昨年に引き続き南毛利戸陵会が獲得して強さを発揮。個人戦では14回生の強さと巧みさが目立ちました。個人成績上位は以下の通りです。

優　勝＝服部勉（高14回）南毛利
準優勝＝中山和男（高26回）睦合
第3位＝斎田耕司（高14回）南毛利
第4位＝二見政宏（高16回）相川
第5位＝渡辺兼行（高19回）平塚
ベスグロ 首藤 武雄（高14回）荻野

なお、今年度は秋に開催予定です。他支部よりのゲスト参加もお待ちしています。

石射会長代行（左）より「厚木連合戸陵杯」が贈られた服部勉さん

相川・依知・小鮎戸陵会

食に着目した街おこしと地域の活性化及び観光振興

平成22年9月18・19日の2日間、厚木市において第5回B級ご当地祭典「B1グランプリinあつぎ」が開催された。

この祭典に1年半前から計画に携わり、推進してきた厚木商工会議所専務理事の原隆氏（高18回）を講師に迎え、街おこしと地域の活性化及び観光振興について、講演を実施した。

日時／平成22年12月2日（水）
午後5時～午後7時
会場／飯山「元湯旅館」
参加／29人
講師／厚木商工会議所専務理事
原　隆氏（高18回）

この祭典、2日間で延べ45万5千人が県内外から訪れ、経済波及効果は36億円といわれ、街おこしと活性化に大いに貢献した。

いまや、食に着目した街おこしや地域の活性化は全国的な流行になりつつある。安くて美味しい身近な食材としてのB級グルメは、確実に市民に支持され、着目されている。

いうまでもなく、この原動力は「厚木シロコロホルモン」であるが、この食材は食肉センターが市内にあり、新鮮な食材として昔から、地元の厚木では当たり前の食材であった。これを街おこしに使おうと「厚木シロコロホルモン隊（中村隊長）」が提案したが、誰も見向きもしなかった。それが、3年前の富士宮市開催の第2回B1グランプリで5位、一昨年の福岡県・久留米大会では優勝するなど、実績をあげ、今年の首都圏初の厚木市への誘致に成功した。

今後の取組みとして、厚木の名産品である「とん漬」を使用した厚木バーガーの開発など地域資源を活用し、企業・地域・大学・行政が連携し、厚木市のイメージアップと、活性化を図らねばならないと締めくくった。

広報委・頼住道夫（高22回）

講師の厚木商工会議所専務理事原隆氏（高18回）

厚木戸陵会

同期生、飯田孝君を偲んで

井上　隆之（高13回）

飯田孝君とは高校13回卒業の同期生でした。彼は高校時代には郷土史研究部の部長をされており、先年実施された母校開校100周年の記念誌でも、執筆を分担されておりました。

昭和40年代の初め、私が大学で歴史を学び、卒業後、厚木市内の遺跡の発掘に携わっていた頃に、厚木高校の郷土史研究部の後輩を引き連れて応援に来てくださったところからのお付き合いであった。特に厚木で初めて埴輪を出土させた飯山地区の堂山古墳の発掘調査で、共に汗を流した日々は若き頃の懐かしい思い出である。

家業は厚木市東町で飯田呉服店を営んでおられたが、その傍ら厚木地域を大切に考えながら郷土史を研究され、厚木市史編纂など、郷土史の分野では多大な功績を残された。その活動分野は多岐にわたっていた。

現地調査を基にした豊富な知識と収集された沢山の貴重な資料が今後も、発表され続けることを期待していただけに同じ郷土史を志す者として誠に惜しまれてなりません。

役職では今、記憶に残る範囲でも厚木市文化財調査委員、同文化財保護審議会委員、厚木市史編纂委員、同編集委員、厚木市文化財協会長などを歴任され、郷土史グループの『史談会』会長をも務められ、第一線で活躍され続けてきた。

近年は、時折会合などでお会いする程度でしたので、体調を崩さ協会長などを歴任され、郷土史グループの『史談会』会長をも務められ、第一線で活躍され続けてきた。

近年は、時折会合などでお会いする程度でしたので、体調を崩されたようすは存じ上げませんでした。

いつもにこやかに接し、若い時には、蕎麦を愛好しながらダイエットを心がけたほど健康に留意されてたはずなのに、あまりにも早い旅立ちであった。

ここに謹んで飯田孝君のご冥福をお祈り申し上げます。

平成22年8月15日逝去　合掌

荻野戸陵会

ふるさとの山再発見へ恒例となったハイキング

荻野地区は山と川に代表されるふるさとと言うにふさわしい地域です。西山系と鷹尾山系の山に挟まれ、荻野川に沿った長い地形で、西山（荻野高取山、華厳山、経ヶ岳からなる）は、大山とともに住民の心の支えであります。里山としての鷹尾山は、現在、桜の植栽が進められ、近い将来には桜の一大名所となることでしょう。

荻野山中陣屋（荻野山中城址）は、天保時代の古地図には荻野山中城と記され、廃藩置県の際は荻野山中県にもなり、その城下町としても格式高い風情も備えています。

荻野は、愛川町田代へつながる長い長い一本道沿いに栄えました。一本道が人をつなぎ、その往来の中で、かなり離れたところにいる人でも何となく顔は見知っているという地域ですから、人を温かくも和やかなものにし、人情的に先輩、後輩の隔たりも無く、何時何処で会ってもお互いに心安い気持ちで接することができます。

こうした恵まれた環境の中、荻野戸陵会の活動は和気あいあい、かつ活発に活動しております。行事として定着したハイキングは、ふるさとの山を見直そうとの合い言葉の下、紅葉盛りの時期、西山に挑戦しました。案内役は「西山を守る会」事務局の荻田豊氏（高17回）。JA荻野支所をスタートし登山道へ。かなり厳しい勾配が続き、新四国88カ所石仏群前で一休み。「もう半分ぐらいは登ったかな」との声に対し、やっと1合目か2合目当たりと案内役が笑っている。一同思わず顔を見合わす。やっとの事で発句石に到着。遙かに江ノ島も見える絶景の眺め。ここで、有志により一句したため発句箱に。

途中、犬の遠吠えが聞こえそちらを見ると、狩猟解禁の猟友会のメンバー2人が下手に向かって銃を構え、真剣な眼差し。道中、まだかまだかの声しきり。ようやく高取山にたどり着き小休止。華厳山で昼食。ここでヒオウギの西山植栽を進めている荻田氏より全員に種の配布を受ける。経ヶ岳の経石に手を合わせ、下山後の懇親会について全員、還暦過ぎの体をだましながら、関東ふれあいの道経由で愛川町田代の半僧坊にようやく到着。中津川に隣接した居酒屋で待ちに待った懇親会。足腰が弱っていると言う割には、驚くべき健啖家揃い。空瓶の数が増えるにつれて西山縦走の達成感に感激もひとしおとなり、大いに親睦を深めることとなりました。諸先輩が築き上げた人情あふれる会が、こうした行事を通じ尚一層の結束が図られることを願ってやみません。

広報委・毛利　昇（高16回）

恒例となったハイキング。今回は西山縦走に挑戦

南毛利戸陵会

厚高の思い出とその後の学究生活

工学博士　神崎　憧（高13回）

私の生家は厚高から歩いて15分の温水（赤羽根）にあり、現在は湘南厚木病院の筋向かいに住んでいます。

男兄弟は4人とも厚高（厚中）のお世話になっています。南中時代はテニスに熱中し、厚高に入ってもテニスを続けましたが成績はかた落ち、途中退部してしまったのが悔やまれます。しかし一昨年は城所文洋厚高テニス部OB・OG会長のご配慮でOB・OG会総会・懇親会に出席させて頂き、当時の部員たちと旧交を温めることができました。私の学年には優秀な友人が多く、厚中の小宮君、座間君（現在桜美林大学教授）、小鮎中の小島君、玉中の三橋君（旧無機材質研究所主任研究員）、南中テニス仲間の内山君など多彩な顔ぶれで大きな刺激を受けた良き友達に恵まれました。しかし苦言とはなりますが、厚高自体は質実剛健から受験校を目指して方向転換をし始めた時代で、そちらの面では暗い時代との印象が残っています。一方強く記憶に残っているのは一年次の応援団による「中庭」での校歌と応援歌の練習で、難波団長と岩堀副団長はいまでも鮮明に脳裏に焼き付いています。昨年は「第4回青春かながわ校歌祭」に参加して校歌と応援歌を歌い、改めて厚高パワーを実感しました。

大学は横浜国大工学部電気化学科に入学、再びテニスに熱中、ペア（翠嵐出身、高校神奈川県3位）にも恵まれて、東日本、全日本の神奈川県代表になりました。また関東リーグでは5戦全勝を2回達成することができました。大学時代の同じクラスには「ピーカーの中の光合成」などの業績で昨年度文化功労者の藤嶋、前東工大学長相澤を始め多くの有能な級友を持てたことは大きな財産となっています。大学院では実験好きとテニスで鍛えた体力でそれなりに活躍でき、前記藤嶋、相澤とともに「横浜国大3羽がらす」と言われたことを誇りにしています。同じ分野での厚高（厚中）の先輩には北大に前田正雄先生（中35回）、横浜国大に国際電気化学会会長を務めた仁木（神崎）克己（高1回）がおり、茅誠司先生を始めとした理系諸先輩方の功績に恥ないよう研究に励みました。青山学院大学に奉職した後、東工大理学部を経て昭和薬科大学（助教授、教授）にて2008年退職を迎えました。東工大時代に発足させた、日本イオン交換学会では会長も務めさせていただきました。会員数200名あまりの小さな学会ですが、ソウルやメルボルンで海外での国際会議を開催したり『最先端イオン交換技術のすべて』を刊行しています。

現在は神奈川工科大など3大学で非常勤講師を務める傍ら、好きな実験研究を続けるため青山学院大（太陽電）および神奈川工科大（バイオセンサー）で客員研究員をしています。退職した現在、ふるさと厚木に何らかの貢献をしたいと、子供のための科学教育を旗印に、科学好きの学生を育てるために神奈川工科大での仕事も含めて少しずつですが、活動を始めるつもりでいます。

2010年7月、メルボルン大学にて。
スティーブンス教授（中）と筆者（右）

玉川・森の里戸陵会

父子2代のブドウ栽培

三橋　修（中40回）

第二の人生は、父と同様大地の温もりを感ずるブドウ栽培をと決めていました。

巨峰は、1942年（昭和17年）、大井上康先生により産声をあげました。石原早生とセンテニアルの交配で出来、高級ブドウの特質と病害抵抗性をもち露地栽培出来ることが特色です。巨峰ブドウの遺伝的な特色は、染色体数が76個（通常の2倍）の4倍体品種です。親の形態や性質を次代に伝える染色体の変化は、徒長的な発育を捉し、花芽分化を不良にし、果実や枝の成熟を遅延させます。また着果数が少なく、種子は大きいが不稔性が多く、気候の変動も受けやすくなります。

これらは巨峰の花振い性や単為結果性をひきおこし、此処に巨峰ブドウ栽培のむずかしさがあります。

この巨峰栽培のむずかしさを、「巨峰の各発育段階の体内生理に対応した栄養条件の変更により優れた結実と成熟の方向に導きうる」という大井上先生の栄養周期理論によって克服できることが日本理農協会の手によって確かめられました。特に長野・埼玉を中心に学習・実践が進められ巨峰の商標登録「商標472182号」が1955年に許可されました。父が入会しブドウ園を開いたのも54年、この頃でした。

● 巨峰果実の特徴

1　果実が14～20g、時に20～28gに及ぶ。

2　果実は糖分が高く上級品は糖分20度以上（普通品17～18度）

3　果肉がしまり水分が少なく、果肉が澄んでいる

4　果皮がよくはがれ、種離れもよい等、高級ブドウの条件を備えている。

● 巨峰果実の欠点

果実が脱粒しやすい

● 栽培の現状

巨峰栽培は、高級ブドウのスタイルとヨーロッパブドウに抱いた夢を実現し、贈答品として高く評価されるだけでなく、食卓用としても好評を博している。しかし栽培農家の高年齢化や栽培技術の進化、ホルモン剤の開発、消費者の好みにより、近年種なしブドウが大勢を占めているが私は関与しない。

清川戸陵会

新会長に石川武久氏（高16回）

山口　朝生（高25回）

清川戸陵会では昨年11月28日に清川リバーランドで総会を行い、6名の会員が出席しました（写真参照）。総会の後には、懇親会を行い、中には親子程も違う年齢の差を越えて、和気あいあいとした雰囲気で交流を深めました。

今年度は役員の改選の年に当たり総会にて新役員が選出されました。会長は2期6年務めて頂いた最長老の中学37回の山田恵一氏から、高校16回の石川武久氏にバトンタッチされました。

新役員は次の通りです。

（任期は3年・敬称は省略）

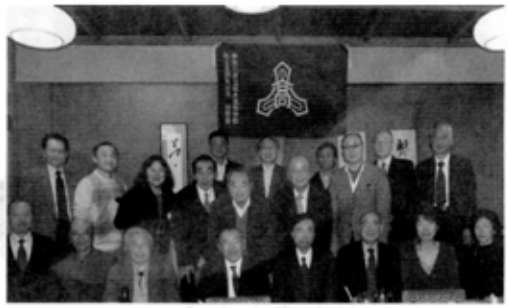
会　長　石川武久（高16回）
副会長　下嶋光久（高15回）
会　計　山口朝生（高25回）
事務局　相原栄一（高20回）
監　査　井上恵弘（高6回）
監　査　岩澤衛（高12回）

山田恵一氏（中37回）から石川武久新会長（高16回）にバトンタッチ

津久井戸陵会

支部会から戸陵会へ名称変更

津久井支部会は、本年2月6日に総会を開催しました。



新年会を兼ねた津久井戸陵会総会

近藤会長、佐々木副校長をお迎えし、18名の同窓生（うち女性3名）が参加しました。

懐かしい『質実剛健』の手拭が額に納められた会場で賑やかに会が進められ、その中で同窓会の名称を津久井支部会から「津久井戸陵会」に変更することが決定しました。

総会の後の懇親会（新年会）では、昨年秋の「青春かながわ校歌祭」と「厚高百周年記念」のDVDを会場のプロジェクターで放映。会の最後の締めとしては校歌と第三応援歌の斉唱。全員で肩を組んでの大合唱となり、同窓生の心がひとつになったようでした。

事務局担当・大塚朋子（高26回）

新潟戸陵会

厚木と佐渡をつなぐもの

会長　青木　茂治（高9回）

同期会（高9回）のメンバーが佐渡旅行に訪れた

佐渡島へは、同窓生の皆さんもたくさん来ておられることでしょう。

新潟市からはジェットフォイルで一時間、カーフェリーで2時間半の距離です。どこまでも澄んだ海や、トキが繁殖しつつある山など、佐渡島にはまだまだ美しい自然が残されています。そして佐渡島は世阿弥、順徳上皇、日蓮などの流刑の地であったため、都の文化が伝えられ、今もその名残が見られる。

ところで、この佐渡島と厚木が意外な歴史でつながっていることは余り知られていないのではと思う（私自身数年前初めて知った）。

実は新潟に住んでみると、「本間」姓の方が多いことに気がつきます。我が家の前隣と左隣は本間さんである。

新潟に多い本間姓の元は佐渡島にあり、長い年月を経て、新潟のみならず東北地方に広がった。殿様をも凌ぐ栄華を誇った酒田の豪商本間家も佐渡に由来する。

この佐渡本間氏の祖となったのが、鎌倉時代初期に守護代として佐渡に渡った本間能久とされている。この本間氏は武蔵七党横山党海老名氏の流れで、その本願の地は相模国愛甲郡依知郷本間である。佐渡島と厚木に、このようなつながりがあると知り、佐渡島がより身近に思えてきました。

新潟で同窓生を迎えたのはしばらく前に、9回生の役員諸氏の佐渡旅行だけです（写真）。同窓生の皆さん、どうぞ佐渡と厚木にはこのようなつながりがあることを頭の隅においていただき、ぜひ佐渡島においでください。そして、その折には新潟戸陵会へも是非ひと声おかけください。

関西戸陵会

「関西戸陵会が誕生しました」

会長　齋藤　十内（高16回）

昨年、5月16日（日）、関西地区（大阪、兵庫、京都、奈良、和歌山、滋賀）在住の同窓生36名が大阪（ホテルグランビア大阪）に集まり「関西戸陵会」が誕生いたしました。

当日は、同窓会本部から近藤会長以下3名も会場にかけつけ、齋藤十内（高16回）新会長に設立承認書と同窓会旗が手渡されました。

100周年記念行事のビデオを観たあとの懇親会では、参加者の皆様が次々と自己紹介を行い、近況報告や高校時代の懐かしい思い出話を披露され、会場は終始和やかな雰囲気に包まれておりました。

（同窓会ホームページより）

近藤同窓会長より齋藤十内新会長（高16回）に設立承認書と同窓会旗が手渡された

全国各地で活躍するOB

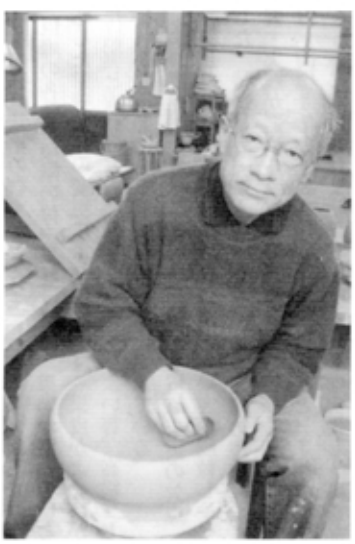
『萩焼に生きる』

岡田　裕（高16回）

私の生家は、山口県萩市で200年続く萩焼窯元です。

たまたま家庭の事情で厚木中学、厚木高校、慶応大学を経て4年間サラリーマンを経験その後、一念発起し萩へ帰ってまいりました。萩焼は朝鮮の陶工によって400年前に始まった茶陶ですが、その色合いと手ざわりが使う人の心を和らげ「一楽、二萩、三唐津」と呼ばれて多くの人に愛されてきました。年月を経て父の後を継ぎ、八代目に就任し、4年前には山口県指定無形文化財の認定を受けました。作陶生活に、また後進の指導に邁進いたしております。私の息子、泰も萩焼の道に入り、日々精進いたしており心強く思っているところです。今年の9月20日から26日まで、横浜そごうにて初個展を開催しますので、よろしくお願いいたします。

また4月27日から5月10日まで池袋西武にて私の「作陶40周年記念」個展を開催いたしますので、皆様の御来廊をお待ちいたしております。



現在130軒ほどの窯元が、萩市を中心に山口県、長門市と、窯の火を保っています。

厚木は、長州藩毛利家の発祥の地として、その居城のあった萩とは深い縁があります。

萩の町は夏みかんと武家屋敷の土塀に囲まれ、また明治維新発祥の地として、多くの観光客に親しまれています。

また萩は自然と歴史に囲まれた風光明媚な街として「山陰の小京都」と呼ばれ、近くの津和野と共に人気があります。私も昨年から萩市観光協会の副会長に就任いたし、萩の魅力を多くの方々にお伝えしております。昨年は、大河ドラマ「龍馬伝」でもたびたび長州は登場いたしましたが、フグや甘鯛など日本海の荒波にもまれた海の幸の味は格別なものがありますし、年末から咲き始める椿の原生林や、初夏を彩る夏みかんの花の甘い香りなど、四季折々に楽しめる風情もあります。複雑に入り組んだ海岸線の美しさや、沖に点在する島々の景色など、市内の城下町と合わせると一幅の絵を見るような思いがします。萩市もこの情景を「庭園都市萩市」と位置付けて、宣伝しております。

皆様の御来萩を心よりお待ち申し上げております。

同期会・OB会便り

"卒後60年"の同期会

宮嶋　實（高3回）

戸室の丘を後にしてから60年、懐かしい同期の面々が一堂に会する日が来た。

平成23年2月6日、会場はロワジールホテル厚木（現レンブラントホテル）。昭和26年の春、戦中・戦後にかけ、中・高6年間を過ごした学舎に別れを告げて校門を出てから長い月日がたった。

今回連絡のついた158名中62名が定刻までに集合し、楽しい集いが始まった。

最初に故人となられた旧友の冥福を祈って黙祷を捧げ、次いで同窓会本部よりの依頼であった故溝呂木勉君（併設中学同期）の"幻のノーベル賞"の話が堀江政伸君から披露され、全員で拍手をし功績を讃えた。

乾杯の後、歓談に入り約2時間の旧交を温める一時を楽しく過ごしたが、出てくる話題は傘寿を前にして、健康の話が多くなり、やはり歳を考えさせられることが多くなった。

最後に入学当時の歌詞で校歌を斉唱し、再会を約して散会した。

＝高6回同期会＝「六厚会」総会の報告

私たち高校第6回卒業生は、「六厚会」と称して総会は1年おきに実施し、今回は7回目の集いであった。この他に30数名の有志で、年に4回ゴルフコンペを行い、現在第36回の参加申し込みを受付中である。

今回の総会は22年6月4日、本厚木駅南口の上海菜館で開催され、55名が参加した。遠くは関西戸陵会の神戸からの初参加もあり、胸の名札を頼りに賑やかな会となった。同級の近藤同窓会長から、母校の現状と同窓会の報告があり、続いて昨年度の「かながわ校歌祭」のDVDが上映され、応援団の振り付けに18歳に戻った興奮で沸き返った。3時間の宴会ですっかり出来上がっていたのに、散会後また厚木の街に繰り出し、どこまでもその余韻を楽しんだもようである。同窓会からの「活性化補助金」御礼に同窓会費納入を誓い合ったことも報告いたします。返った。3時間の宴会ですっかり出来上がっていたのに、散会後また厚木の街に繰り出し、どこまでもその余韻を楽しんだもようである。同窓会からの「活性化補助金」御礼に同窓会費納入を誓い合ったことも報告いたします。

＝高28回同期会　開催報告＝4年後の再会を約す110名

前回、2006年7月に初めての全体同期会を開催し、『ワールドカップ開催年に同期会を開催する！』との約束から4年。3月下旬に、厚木高校の会議室に幹事が集合し、準備を進めてきました。当日（7月3日）は、ロワジールホテル厚木の会場に、小林正義先生（D組）、小泉忠久先生（E組）、農田秀夫先生（F組）、石井初男先生（H組）、大橋宥海先生（I組）と5名の恩師にご列席をいただき卒業以来34年ぶりの再会となる初参加28名を含めて総勢110名が集合しました。

今回の同期会は、石塚修（C組）の司会進行で開会し、物故者への黙祷の後、幹事代表あいさつ＝古屋一恵（F組）、乾杯＝関野俊之（C組）の後は、すぐに打ち解けた雰囲気になり、伊勢正三のBGMが流れる会場では歓談が交わされ、ステージ正面に飾られた「尾瀬沼での集合写真」や「厚高の男子制服」を懐かしそうに眺めていました。恩師からの当時のエピソードを交えたごあいさつは、全員"まじめ"に拝聴し、感謝の意を込めて花束を贈呈させていただきました。

5名の恩師を迎え、4年ぶりの高28回同期会開催

恒例の『校歌斉唱』では、ブラスバンド部の演奏を録音したCDの曲に合わせて、応援団OBの阿部一彦（D組）、森住照雄（A組）、五十嵐潤（I組）の現役時代と同様？の迫力ある指揮のもと、やや腕の上げ下げが心もとなくなった同級生と肩を組みながら、しっかり3番まで斉唱しました。

中締めのあいさつに立った名取裕子（C組）から『4年後、ブラジル大会で会いましょう！』とのあいさつに、会場から盛大な拍手が送られ、盛会のうちにお開きとなりました。

中締めのあいさつに立つ名取裕子さん

＝厚高応援団OB会＝新入生に校歌の歌唱指導

去る4月12日（火）午後1時30分より、体育館に於いて新入生オリエンテーションの一環として、厚高応援団OB会（大谷哲郎会長他18名参加）より、校歌の歌唱指導が行われました。

大谷会長の挨拶で始り、創立百周年記念式典・夏の高校野球の応援・第4回青春かながわ校歌祭等の校歌斉唱のビデオが上映され、引続き長嶋克佳副会長の指導の下、新入生全員と応援団OB並びに同窓会役員（6名）も一緒に、校歌1番を何回も歌い、練習をしました。

新入生には短い時間で、初めてであり、覚えきれなかったかもしれませんが、努力してください。

最後に近藤俊二同窓会長の挨拶で終了しました。

難波　浩（高11回）

「中庭」での校歌・応援歌の練習を彷彿とさせる一コマ

同窓会本部役員・理事・支部役員〈平成23年4月1日現在〉

【同窓会本部役員】

会長	近藤　俊二	（高6）
副会長	梅澤　行次	（高7）
副会長	安藤　和次郎	（高9）
副会長	石川　範義	（高10）
副会長	佐藤　忠一	（高10）
副会長	八木　一郎	（高14）
会計監査	大津　博康	（高10）
会計監査	佐藤　裕洋	（高10）

【同窓会本部事務局】

事務局長	杉田　泰繁	（高14）
事務局次長	石塚　修	（高28）
会計	足立原　泰	（高12）

【同窓会校内事務局】

事務局次長	須藤　福治	（高28）
事務局総務	坂本　修一	（高33）
会計	吉垣　武	（高39）
支援基金担当	内田　憲夫	（高30）

【理事】

1	篠崎　源太郎	（中31）
2	中野　昇	（高5）
3	稲垣　嘉則	（高6）
4	長田　敬幸	（高7）
5	川田　善久	（高7）
6	高橋　武彦	（高8）
7	青木　茂治	（高9）
8	朝生　旭	（高9）
9	大貫　隆広	（高9）
10	櫻井　晃	（高9）
11	八木　陽一	（高11）
12	井出　照雄	（高11）
13	城所　文洋	（高11）
14	難波　浩	（高11）
15	花上　肇	（高11）
16	町山　良行	（高11）
17	花田　克雄	（高12）
18	落合　重治	（高13）
19	曽根　秀敏	（高14）
20	志村　昂二	（高15）
21	鶴指　眞澄	（高15）
22	新倉　正治	（高15）
23	石川　武久	（高16）
24	森久保　純生	（高16）
25	齊藤　十内	（高16）
26	伊藤　修治	（高17）
27	大井　理恵子	（高18）
28	星　博美	（高18）
29	小林　義廣	（高18）
30	池田　清	（高19）
31	廣木　孝幸	（高19）
32	花田　あみ子	（高20）
33	広澤　操	（高20）
34	大塚　朋子	（高26）
35	剣持　典子	（高26）
36	斎藤　昌代	（高26）
37	高橋　昌和	（高27）
38	伊藤　学	（高30）
39	山本　善一	（高30）

【各地区同窓会支部】

1. 伊勢原戸陵会
　会長　花田　克雄　（高12）
　事務局長　小川　均　（高22）
2. 秦野戸陵会
　会長　八木　伸一　（中40）
　事務局長　松永　光弘　（高24）
3. 津久井戸陵会
　会長　小野沢　純男（中40）
　事務局長　小林　義廣　（高18）
4. 平塚戸陵会
　会長　落合　重治　（高13）
　幹事長　渡辺　兼行　（高19）
5. 横浜会
　会長代行　長田　敬幸　（高7）
6. 相模原戸陵会
　会長　篠崎　源太郎（中31）
　事務局長　安藤　和次郎（高9）
7. 座間戸陵会
　会長　瀬戸　宏孝　（高4）
　幹事長　山本　愈　（高11）
8. 愛川戸陵会
　会長　八木　陽一　（高11）
　幹事長　大貫　邦重　（高16）
9. 川崎市多摩麻生戸陵会
　会長　町山　良行　（高11）
10. 綾瀬戸陵会
　会長代行　新倉　正治　（高15）
　事務局長　笠間　城治朗（高14）
11. 海老名戸陵会
　会長　杉崎　秀夫　（高17）
　事務局長　鶴指　眞澄　（高15）
12. 三浦半島戸陵会
　事務局長　伊藤　学　（高30）
13. 大和戸陵会
　会長　高橋　武彦　（高8）
　事務局長　鈴木　克則　（高27）
14. 御所見戸陵会
　会長　井出　照雄　（高11）
15. 厚木連合戸陵会
　会長代行　石射　隆宏　（高14）
　幹事長　伊藤　修治　（高17）
　事務局長　森久保　純生（高16）
①厚木戸陵会
　会長　川田　善久　（高7）
　事務局長　池田　清　（高19）
②依知戸陵会
　会長　櫻井　晃　（高9）
　事務局長　伊藤　修治　（高17）
③睦合戸陵会
　会長　難波　浩　（高11）
　事務局長　吉川　昭　（高26）
④荻野戸陵会
　会長　花上　肇　（高11）
　事務局長　諏訪　寿夫　（高16）
⑤小鮎戸陵会
　会長　志村　昂二　（高15）
　事務局長　森久保　純生（高16）
⑥南毛利戸陵会
　会長　城所　文洋　（高11）
　事務局長　小渕　正志　（高18）
⑦玉川・森の里戸陵会
　会長　朝生　旭　（高9）
　事務局長　高橋　増次　（高11）
⑧相川戸陵会
　会長　大貫　隆広　（高9）
　事務局長　二見　政宏　（高16）
16. 清川戸陵会
　会長　石川　武久　（高16）
　事務局長　相原　栄一　（高20）
17. 新潟戸陵会
　会長　青木　茂治　（高9）
　事務局長　齊藤　勝司　（高8）
18. 関西戸陵会

同窓会ホームページのご案内

http://www.atsukou-dousou.org/

同窓会本部では、公式ホームページを開設しています。動画や写真など、多彩な内容で同窓生の皆様に時々の情報をお伝えしています。ぜひご覧ください。

事務局便り

事務局スタッフ8名に

本年4月の人事異動で、社会科の渡辺卓先生（高31回）が綾瀬西高校へ、2年間マレーシアへ派遣されていた数学科の松岡洋明先生（高37回）が伊志田高校へご転勤となりました。先生方には長年にわたり同窓会の各種活動に大変ご尽力をいただきました。

今年度は新たに社会科の三橋功先生（高38回）を迎え、次の8名の校内役員で諸処の活動に頑張っていきます。同窓諸兄のご協力を何卒よろしくお願い申し上げます。

・須藤　福治（高28回・数学）
・小牧　住子（高29回・英語）
・中山　鉄也（高29回・音楽）
・内田　憲夫（高30回・理科）
・内野　秀明（高30回・数学）
・坂本　修一（高33回・国語）
・三橋　功（高38回・社会）
・吉垣　武（高39回・数学）

編集後記

◉今回誌面に載せることが出来ませんでしたが、現役厚高生の部活における最近の活躍ぶりには、目を見張るものがあります。この冬から春にかけての全国大会出場が弓道部、ダンスドリル部、新聞部、文藝部、吹奏楽部の5部活をはじめ、その他大会でも6部活が優秀な成績を修めています。詳細は、厚木高校のホームページから『厚高新聞』をご参照いただきたい。

◉平成19年度から同窓会本部に広報委員会を設置、現在19の支部に広報委員を委嘱して年4回程の会議とそれにもとずく情報収集・取材活動を行い、会報の発行にあたっています。

◉ちなみに今号の発行に際しては昨年11月13日の編集企画会議、本年3月13日の誌面構成会議、4月10日の初校、4月22日の最終校正というスケジュールをたどっています。

◉各支部内のニュースやOBの活躍情報など、下記委員まで取りあえずご一報いただければと思います。皆様のご支援ご協力をお願いいたします。

広報委員会名簿

（平成23年7月22日末現在）

役職	氏名	卒会	所属戸陵会	連絡先
委員長	佐藤　忠一	（高10）	同窓会本部（副会長）	0466(48)2222
副委員長	小澤　久夫	（高21）	伊勢原戸陵会	0463(94)0756
副委員長	小塩　恒夫	（高22）	相川戸陵会	046(228)0344
副委員長	池田　光義	（高9）	相模原戸陵会	046(256)1255
委員	古屋　一憲	（高28）	秦野戸陵会	0463(76)6930
委員	長田　敬幸	（高7）	横浜会	0467(78)5762
委員	鳥羽　克彦	（高38）	座間戸陵会	046(252)5438
委員	大貫　邦重	（高16）	愛川戸陵会	046(281)0014
委員	廣田　敏之	（高17）	海老名戸陵会	046(231)5329
委員	大貫　睦男	（高17）	御所見戸陵会	0466(48)5121
委員	青木　清治	（高8）	大和戸陵会	046(269)2109
委員	池田　清	（高19）	厚木戸陵会	046(228)2210
委員	大塚　憲二	（高18）	依知戸陵会	046(245)5488
委員	山岡　清	（高21）	睦合戸陵会	046(241)7672
委員	毛利　昇	（高16）	荻野戸陵会	046(241)0132
委員	頼住　道夫	（高22）	小鮎戸陵会	046(248)2100
委員	小島　聡	（高33）	南毛利戸陵会	046(247)1029
委員	山口　義章	（高15）	玉川・森の里戸陵会	046(247)0477
委員	石川　武久	（高16）	清川戸陵会	046(288)1981
委員	佐々木　健	（高15）	新潟戸陵会	025(381)2681
委員	齊藤　十内	（高16）	関西戸陵会	saito-junai@spindle.co.jp
委員	杉田　泰繁	（高14）	同窓会本部（事務局長）	046(221)3736
委員	石塚　修	（高28）	同窓会本部（事務局次長）	046(241)7399
委員	志村　祐一	（高24）		046(224)0877